

魚病と養魚技術指導

中村幹雄・後藤悦郎・山本孝二

県内の病魚の診断、治療と養魚に関する技術の指導を行ったので報告する。

表-1 魚種別指導項目、件数の一覧表

	魚病診断治療	養植技術	種苗生産	新規に養殖始める	放流に関するもの	計
マゴイ	3	7	1		1	12
ニシキゴイ	2	1				3
キンギョ	1					1
ニジマス	6	2				8
ヤマメ・アマゴ	6	6				12
フナ						
アユ	1		1		1	3
ホンモロコ				1	2	3
ワカサギ					1	1
ウナギ		1				1
ティラピラ	1	1		1		3
スッポン	1	3		2		6
タニシ	1	1				2
ジャンボタニシ	2	3				5
ハマチ	1	5				6
マダイ	1	3				4
その他						

当分場が本年度行った魚病診断、治療並びに養魚指導を表-1にまとめた。

○県下の淡水養殖は、全般的に餌料や電気代等の必要経費の高騰と商品価格（生産魚）の低迷のため低調な1年であった。しかし一方、農山村においては減反政策や不景気による雇用機会の減少から新たに養殖を始めることを希望し、相談に訪れられた人も多かった。

○錦鯉業者の一部で6月下旬、青仔に成長した鯉に繊毛虫のトリコディナの大量発生をみた。ホルマリン20～30ppmの薬浴で効果があった。

○錦鯉で冬期、業者が“ねむり病”と呼ぶ疾病が2例あったが、細菌分離が出来なかった。

○新たに“ジャンボタニシ”と呼ばれるものの養殖がマスコミ等の注目を浴びて県下でも6企業が開始した。しかし，“ジャンボタニシ”の生態にはいまだ不明な点も多く，養殖魚種としての“ジャンボタニシ”の適正については疑問が持たれる。

○斐伊川漁業協同組合でアユの中間育成施設が完成し，中間育成を開始した。

○掛合町の農家が2000㎡の鯉の養魚池を造成し，食用鯉の養成を始めた。

○ニジマス・ヤマメ・アマゴについては細菌性鰓病の被害が大きかったが，飼育環境の改善を計ることで防止できると思われる。

○ワカサギ8,000万粒のふ化放流を行った。